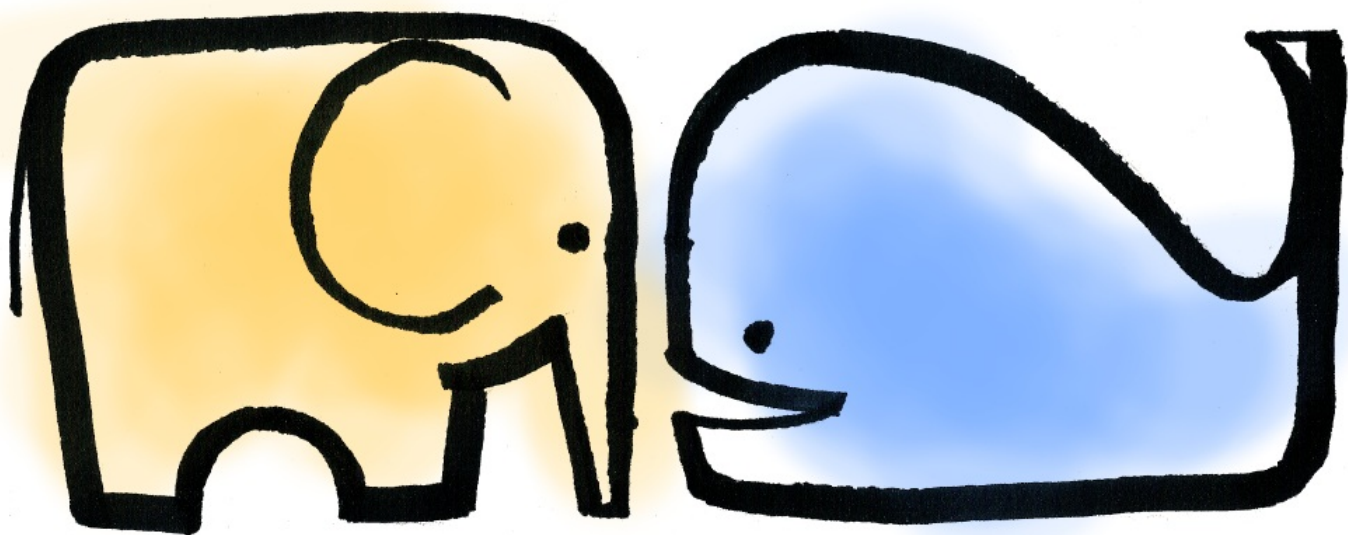
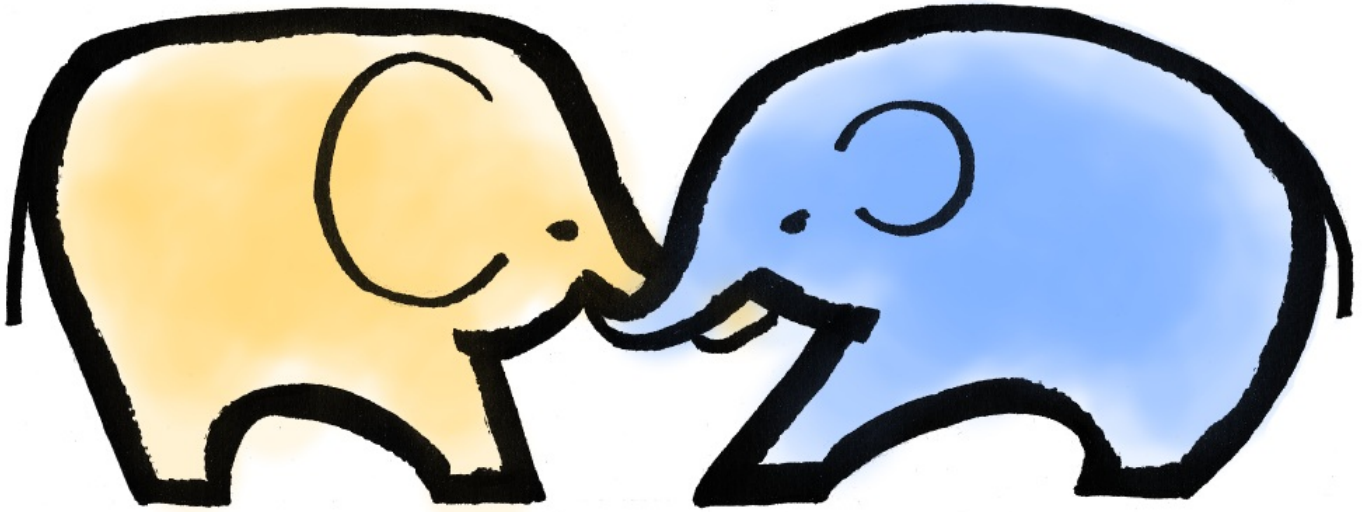


ぼくがいちばん!





むかし、クジラは陸に住んでいました。
四本の太い足と長い鼻と、それからしっぽもありました。
こんなクジラとよく似た動物がありました。
それはゾウでした。二ひきとも大きくて強くてりっぱでした。

ある日クジラがいました。
「ここではぼくがいちばん大きいよ」

するとほかの動物たちが口をそろえていました。
「ゾウさんも大きいよ」

そこでクジラはゾウと、大きさをくらべすることにしました。
クジラとゾウはいっしょにならぶとほとんど同じ大きさでした。
クジラは鼻を高くもちあげて、お腹を思いきりふくらませました。

ゾウはそんなクジラを見て思いました。
いちばんになりたがっているクジラをいちばんにしてやろうと。
そこでゾウは大きな耳を体にぴったりくっつけて、鼻をせいいっぱいちぢめました。

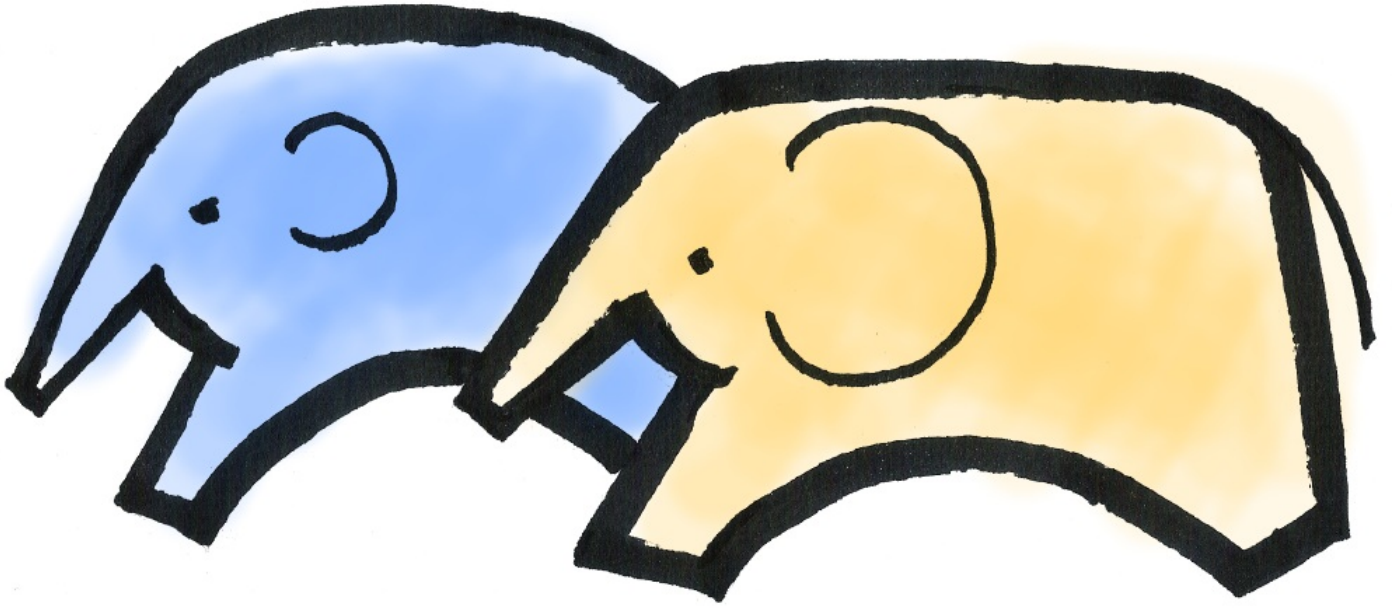
みんなはクジラの方が大きいといいました。
そこでクジラはいちばん大きな動物ということになりました。

ある日、またクジラがいました。
「ここではぼくがいちばん強いよ」
するとほかの動物たちがまたいいました。
「ゾウさんも強いよ」

そこでクジラはゾウと、力くらべすることにしました。
二ひきは鼻と鼻をからませて引っぱり合いを始めました。

真っ赤な顔をしてがんばっているクジラを見て、ゾウは思いました。
いちばんになりたがっているクジラをいちばんにしてやろうと。
そこでゾウは太い前足を一步前に出しました。

みんなはクジラの方が強いといいました。
そこでクジラはいちばん強い動物ということになりました。



それからしばらくして、クジラがまたいました。
「ここではぼくがいちばん早いよ」
するとまたほかの動物たちが同じようにいました。
「ゾウさんも早いよ」

そこでクジラは、ゾウとこんどは早さくらべをすることにしました。
二ひきは、よーいどんで走り始めました。

まっすぐ前を向いて鼻息もあらく走っているクジラを横目で見、ゾウはまた思ったのです。
いちばんになりたがっているクジラをいちばんにしてやろうと。

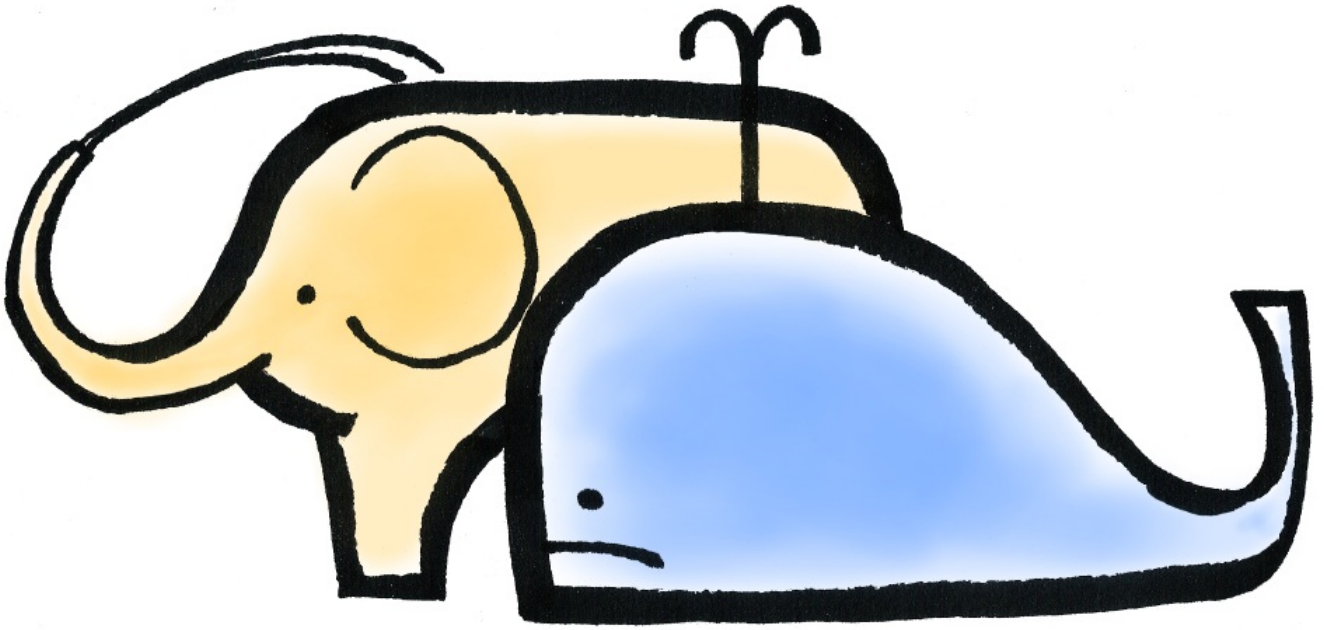
ゾウは少しゆっくり走ることにしました。
クジラはゾウが少しおそくなったのに気がつく、もっと差をつけようと夢中で走りました。

するとその時、目の前に大きな川が見えました。
クジラはあわてて止まろうとしましたが、間にあいません。
いきおいあまって川にざぶーんと飛びこんでしまいました。
クジラは泳げませんでした。

川の手前で止まったゾウは、おぼれているクジラに長い鼻をのばしてやりました。
クジラは必死でゾウの鼻に自分の鼻をからませました。
ゾウが、よいしょとクジラをひっぱりあげようとした時でした。

「やっぱりぼくがいちばん早いよね」
クジラがこういったのです。

その時でした。ぶつんと大きな音が生、クジラの鼻がとれてしまいました。
クジラはまた川へまっさかさまに落ちていきました



とれてしまったクジラの鼻は、後ろへひっくりかえったゾウの鼻にびたりとくっついていました。
ゾウの鼻は前よりもっと長くなりました。

クジラはそのまま川を流されていきました。
やがて気がつくやうに、広い海へたどりついたのでした。
いつの間にか鼻はすっかりなくなり、足はひれとしっぽになって、海の中を泳いでいました。

それからずっと、クジラは海に住んでいます。
海の魚たちは、クジラはいちばん大きくて、いちばん強く、いちばん早く泳げると思っています。

陸の動物たちは、ゾウがだれよりも大きくて、強い動物だと思っています。
ゾウは草を食べる動物なので、ほかの動物を追いかけたことはありません。
でも本気で走ったらいちばん早いことは、みんながよく知っています。

クジラにもらった長い鼻はとても役に立ちます。
草をむしって口へ運んだり、水を飲んだり体にかいたり。
こんなに便利な鼻を持っている動物は、ほかにはいません。

海で暮らすようになったクジラは、ゾウのことも、なくした鼻のことももうすっかり忘れてしまいました。
でも今でも時々水面に顔を出しては、空に向かって潮をふきあげてこう叫ぶのです。
「ぼくがいちばん！」と。

おわり